

見えるのは此の名に當るものであらうか。但し今日に行はれてゐる古體シリヤ語の新約書には、この名は *gâgultâ* と見えてゐる。

結 語

以上述べたところが若し幸に甚しき謬見に陥らないならば、此の經は唐初東來の景士が教義宣傳の爲に、まだ熟達しない漢語の知識を絞つて論述したもので、意味の解し難い處は甚だ多いが、それにしても彼等が當時社會の状態をよく考察して、それと調和を保つ方針の下に、徐に教義を説いたものであることを觀取することが出來、景教遺文として重要な性質を有するものと思はれる。更に詳細なる研究を積めば、經中難解の字句も漸次解明し得らるゝであらうし、また論述者の用ひた聖典が如何なる國語で書かれたものであつたかも知り得られ、従つて其の國籍などを判定する上にも根據を得るに至るであらう。すべてそれ等の事柄については新に研究者の出ることを期待して此の稿を終ることにする。

註① 藝文第九年第一號、拙稿景教經典一神論解說（編者註、本卷一二三五—九頁）。また Chavannes et Pelliot, *Un traité manichéen retrouvé en Chine*, p. 160 參照。

② 同上。*Conjugaison du type Bible à l'écriture chinoise*

③ 上海商務印書館發行東方文庫第七十一種考古學零簡中に載する抗父氏の「最近二十年間中國舊學之進歩」の一篇中に見ゆ

④ この事については近く出版さるべき此の殘卷の解說に於て論述する筈であるが、曾て史學研究會に於て話した要領が史林第八卷第四號一五八頁に見えてゐるから、それによつても大體の論據は知り得られる譯である。